



# ランボー詩集

栗津則雄訳

新潮社

世界詩人全集 9

ランボー詩集

昭和四十三年三月十五日印刷  
昭和四十三年三月二十日発行

価五〇〇円

訳者 粟津則雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一  
電話(20)二二 振替東京八〇

印刷所 大日本印刷株式会社  
製本所 新宿 加藤製本所

(乱丁、落丁本はおと  
りかえいたします)

〈第6回配本〉

目次

初期散文

〔太陽はまだあつく燃えていた……〕

初期韻文詩

みなし子たちのお年玉

感覚

太陽と肉体

オフェリヤ

首吊りどもの舞踏会

タルチュエフ懲罰

〔一七九二年と九三年の戦死者たちよ〕

音楽につれて

水から出るヴィナス

最初の夜

ニナの返答

びっくりした子供たち

小説

悪

冬を夢みて

谷間に眠る男

みどり亭で

わが放浪

坐りこんだやつら

牧神の頭

パリの軍歌

しゃがみこんで

七歳の詩人たち

教会の貧民たち

盗まれた心臓

ジャンヌ・マリーの手

看護修道尼

母音

九

一七

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

一四

一五

一六

一七

一八

一九

二〇

〔星はおまえの耳のただなかで……〕  
花について詩人に語られたこと

二〇八

最初の聖体拝受

二三

しらみを探す女たち

二三

酔いどれ船

二三

## 後期韻文詩

渴の喜劇

二四

忍耐の祭

五月の軍旗

二五

一番高い塔の歌

二五

水遠

二五

黄金時代

二五

おれの心よ、いったい何だ……

二五

ミシェルとクリスチーナ

二六

恥

二六

記憶

二六

愛の砂漠

愛の砂漠

二七

福音書による散文

〔サマリヤでは……〕

二七

〔ガリラヤの軽やかな心惹く空気……〕

二八

〔ベテスダ……〕

二八

地獄の季節

〔おれの思い出が本当なら……〕

二七

賤しい血

二八

地獄の夜

二八

錯乱Ⅰ

二〇四

錯乱Ⅱ

二二

不可能

二六

閃光

二二

朝  
別れ

三三  
三四

橋  
町

三六  
三五

イリュミナシヨン

大洪水のあと

三四

放浪者

三九

少年の日

三四

町々 (近代蛮族文明の)

三七

コント

三四

眠られぬ夜々

三七

客寄せ道化

三五

神秘

三四

古代

三五

あけぼの

三七

美しい存在

三五

花々

三七

生活

三五

卑俗な夜曲

三七

出発

三五

海景

三七

王権

三七

冬の祭

三七

或る理性に

三七

苦惱

三六

陶酔の午前

三六

首都の景

三六

断章

三六

野蛮人

三六

労働者

三六

大売出し

三六

妖精	二八五
戦	二八六
若い日々	二八七
半島	二八九
さまざまな舞台面	二九〇
歴史の暮方	二九一
ポトム	二九三
H	二九四
運動	二九五
祈念	二九七
民主主義	二九八
精霊	二九九
☆	
解説	三〇一
ランボー年譜	三〇六

(粟津則雄)

ラン  
ボ  
ー  
詩  
集





初  
期  
散  
文



「太陽はまだあつく燃えていた……」

## I プロローグ

太陽はまだあつく燃えていた。だがもうほとんど地上を照らしてはいなかった。巨大な円天井のまえに置かれた灯明がもはや弱々しいかすかな光で天井を照らすにすぎないように、地上の灯明である太陽は、その燃える身体から、最後の弱々しいかすかな光を放ちながら消えかかっていた。だがそれでもまだ、樹々の緑の葉や、しおれかかった小さな花々や数百年を経た松やポプラや檜の巨大な梢を見ることができた。身をさわやかにする風、つまりさわやかなそよ風が、足もとを流れる小川の銀色の水そっくりりに、ざわめきわたる樹々の葉をそよがせていた。羊歯しだが、風のまえで緑の額を垂れていた。ぼくは睡りにおちた、小川の水に身を濡らしながらだ。

## II

ぼくは夢をみた……一五〇三年にランスで生れたのだ。

その頃、ランスは、クロヴィス王の聖別式を目撃した美しい大聖堂で有名ではあったが、まだ小さな町だった、と言うより大きな村だった。

ぼくの両親は豊かとは言えなかったが、ほんとに正直な人たちだった。昔から伝わってきてぼくが生れる二十年もまえに彼等の持物となった一軒の小さな家、今でも母がつましくして何ルイかずつ積み足してゆかねばならぬ何千フランかの金、これが彼等の財産のすべてだった。

父は親衛隊の士官<sup>原注1</sup>だった。大柄で、瘦せぎすで、髪は黒く、ひげも眼も肌も同じような色をしていた。ぼくが生れたときは、四十八か五十くらいにしかなくていなかったけれど、ほかの人たちには、きつと六十か五十八に見えたことだろう。烈しい、激しやすい性格で、よく腹を立て、氣にくわぬことは少しも我慢しようとしなかった。

母はまったくちがっていた。やさしい、もの静かな女性で、なんでもないことにびっくりしたりしたが、家のなかのことはすみずみまできちんととり仕切っていた。とてももの静かな人だったから、まるで年若い娘さんみたいに、父のことを面白がっていた。ぼくは一番かわいがられていた。兄弟たちはぼくほど無鉄砲ではなかったけれども、ぼくより大きかった。ぼくは、勉強というやつ、つまり読み書き計算を覚えるということがどうも苦手だった。ところが、家のなかを整頓したり、野菜畑を耕したり、お使いをしたりするこ

ととなると、しめたというわけだ、そういうことが好きだったのだ。

今でも覚えているが、ある日、父は、もしぼくがある割算をうまく解いたら二十スウクされると約束した。で、はじめたわけだが、やりとげることができなかつた。もし父に何かを読んでやることができたら、お金や、おもちゃや、お菓子をくれると何度約束してくれたことだろう、あるときなどは五フランくれるとまで言ったのだ。こんな状態だったのに、ぼくが十になると、学校へ入れてくれた。なぜだろう——と、ぼくは考えたものだから——なぜ、ギリシャ語やラテン語を勉強するんだろう？ わからない。結局、誰にもそんなことは必要じゃないんだ。試験に通ることがぼくにとってなんだっていうんだ、試験に通ることがなんの役に立つというんだろう、なんの役にも立ちゃしない、そうだろう？ いや、そうでもないか。試験に通らないと職がえられないってことだ。だが、ぼくは、職なんか欲しくない、ぼくは金利生活者になるんだ。かりに何かの職をえたいと思うにしてもだ、いったいなんだってラテン語を勉強するんだい？ 誰もそんな言葉を喋ってはいないんだ。時々、新聞などでラテン語を見かけることがある。だが、ありがたいことに、ぼくは新聞記者などになりはしないのだ。どうして歴史や地理などを習うんだろう？ たしかに、パリがフランスにあることは知っているべきだ、だが、パリの緯度など誰も聞きはしない。歴史だってそうだ、シナルドンとか、ナポボラサルとか、ダリウスとか、シリウ

スとか、アレクサンドルとか、その他その悪魔めいた名前でも有名な連中の生涯を教わるのは、苦業というものではないか？

アレクサンドルが昔有名な人物だったということが、ぼくにとって、このぼくにとつてなんだというのだ？ いったいなんだっていうんだろう……ラテン民族が存在したかどうかどうしてわかるんだ？ たぶん、ラテン語というやつは、でっちあげた言葉なのだ。かりに彼等が存在していたにしても、ぼくが金利生活者になる邪魔をしないで欲しいものだ。自分たちの言葉は自分たちだけのことにしておいて欲しいものだ。こんな苦業に放りこまれるようなどんな悪いことを、ぼくが彼等にしたいというのだ？ お次はギリシャ語だ。このけがらわしい言葉など、誰ひとり、まったく誰ひとり喋ってやしない！……

ああ！ まったく糞くらえだ！ 糞くらえ！ ぼくは金利生活者になるんだ。長椅子でズボンをすりへらすのは、そんなに気持のいいものじゃない、畜生、大糞くらいやがれ！

靴みがきになるために、靴みがきという職を手に入れるために、せいぜい試験に通るがいい、君たちに許される職と言えば、靴みがきか、豚飼か、牛飼くらいさ。ありがたいことに、ぼくは御免こうむるよ、糞くらえだ！ 君たちは、そうやって努力した御褒美に、横っ面をひっぱたかれて、畜生とか、これは本当じゃないが、餓鬼だとか、呼ばれるのだ

ああー 冀くらえだ！……

続きはまた直ぐ。

アルチユール

*Le Soleil était encore chaud*

原注 1 近衛騎兵隊の大佐

※一八六二年から六四年まで、ランポーは、シャルルヴィルのロサ学院に通っていた。この文章は、そのころ手帳に書かれたもので、現存するランポーの作品中もっとも古いものである。



